

命に限りがあるということ、私たちは頭では理解しています。しかし、心底理解しているかという、そうではないことが多いと思います。むしろそのことを忘れていたことがほとんどではないでしょうか。

「百年前ぼくはここにいなかった 百年後ぼくはここにいないだろう」

詩人・谷川俊太郎の「朝」という詩の一節です。「私たちは死ぬ」と単に言うより、より深く心に響いてきます。心底そのことがわかってくる表現ではないでしょうか。

百年前に存在せず、百年後にはここにいない自分を深くかえりみた時、今ここに存在する事や、取りまく世界が、奇跡のようなものを感じられてきませんか。

谷川の詩は次のように続きます。

「あたり前のところのようできて 地上はきっと思いがけない場所なんだ」

今、この世界に存在しているということが尊く感じられてくるというのです。

そしてそれは、自分だけではありません。あなたも、彼も、彼女も、みんなみんな、限りある命を生きる存在です。私もあなたも、百年前そして百年後、存在しないのです。今、私たちは、奇跡のような時間を生きているのです。

その時間を、例えば、怨みや怒りの感情をもって、争いごとに費やすのだとしたら、これはとてももったいないことではありませんか。

そして怨みや怒りを抱く相手も、限りある命を生きています。相手も、死ぬのです。深くそのことを認識すれば、いつしか相手のことを、むしろいとおしい存在だと思うようになるのではないのでしょうか。その時、自ずとマイナスの感情は静まるはずです。

詩は、次のように結ばれています。

「今朝一滴の水のすきとおった冷たさが ぼくに人間とは何かを教える
魚たちと鳥たちとそして ぼくを殺すかもしれぬ けものとするら
その水をわかちあいたい」

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

争いが静まった究極の形かもしれません。

限りある命を生きるのは人間だけではありません。生きとし生けるものすべてがそうなのです。

法句経にこのような言葉があります。

「『われらは、ここにあって死ぬはずのものである』と覚悟をしよう、このことわりを他の人々は知らない。しかし、このことわりを知る人々があれば、争いはし
ずまる」

自らが死にゆく存在であることを、心底理解するとき争いがしずまることを、お釈迦様は示されているのです。

— 終 —